

なり薄いという印象を受ける。おそらく台部がかなり乾燥して強度を持った後に笠部の接合を行ったと考えられる。

以上の調査結果から次のようにまとめられる。現在の堤は南側に大きく盛土がなされ、その分内堤の幅は拡張されている。よって、本来の内堤斜面は今回の調査では検出されなかった。本工事にあたっては、遺構の存在する可能性が考えられることから、掘削を最小限とする工法を検討することとなった。

(徳田 誠志)

磐衝別命墓・磐城別王墓鳥居改築箇所の調査

垂仁天皇皇子磐衝別命及び皇孫磐城別王の両墓は石川県羽咋市川原町にあり、羽咋神社に隣接している(第30図)。両墓の鳥居は長く不在であったが、今回再建することとなり、施工予定地の掘削にあたって、遺構・遺物の有無を確認するために平成10年11月2日から6日に立会調査を実施した。

掘削箇所は両墓とも鳥居基礎部分のみであり、縦4.0m、横2.0m、深さ1.6mである。層序は共通し、下記の通りである(第31図)。

I層 表土。黒色砂質土、落葉等による腐植土。

II層 埋戻土。暗茶褐色砂質土、前鳥居撤去後の埋戻土もしくは盛土。

III層 地山。漸移層を含む、黄褐色砂質土。



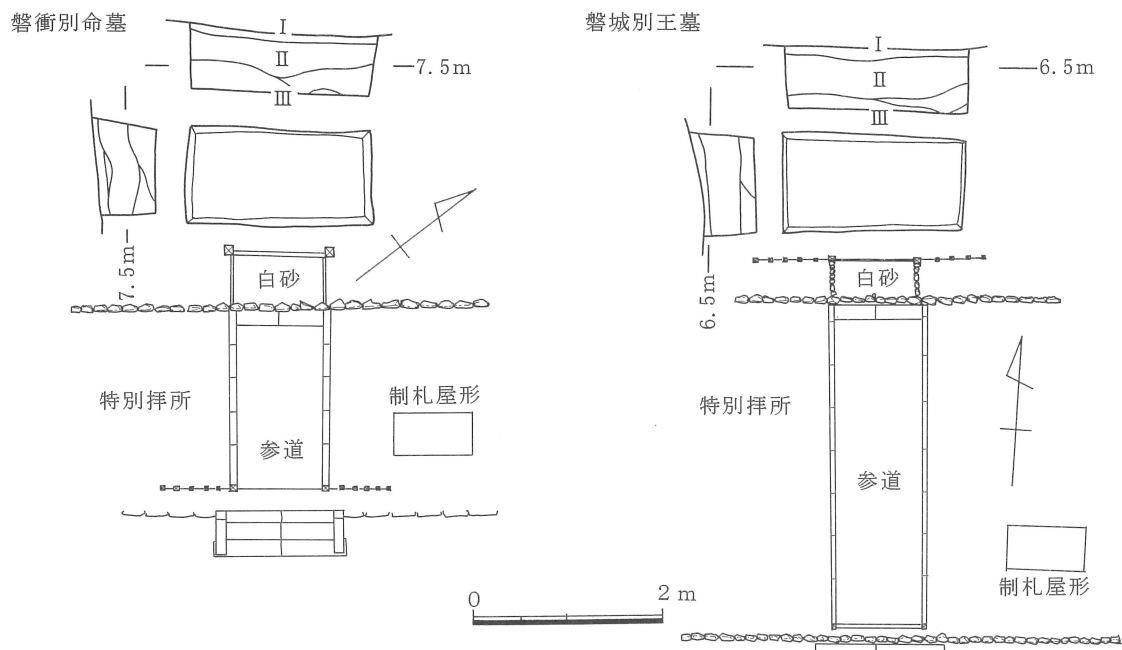
第30図 磐衝別命墓・磐城別王墓調査箇所位置図(1/2000)

磐衝別命墓においては、このII層内より近代以降に属すると考えられる陶磁器片が出土した。磐城別王墓においても同様にII層から陶磁器片、及び旧鳥居の基礎に使用していたと思われる煉瓦・ボルトなどが出土した。いずれも遺構に伴うような出土状況ではなく、前鳥居撤去後に埋戻した際、混入したと考えられる。

結局、今回の調査箇所では古墳に関する遺構は存在しなかった。担任陵墓守部の話によれば、墓前が現状のように整備される以前(大正年間頃)は、周囲には民家が存在してい

たとのことであり、今回出土した陶磁器類もその当時の遺物と判断した。

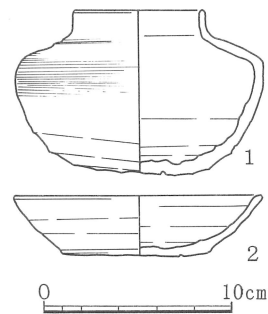
今回の調査では古墳時代に遡る遺物も一切出土しなかった。磐衝別命墓、磐城別王墓については両墓をひとつの前方後円墳と見る指摘もあるが⁽¹⁾、今回はその是非を判断をすることができるといえる所見は一切得られていない。隣接する本念寺の庭には、磐衝別命墓から出土したと伝えられる石材が庭石として用いられている。今回の調査時にその石を実見したが、古墳の石室に使



第31図 磐城別命墓・磐城別王墓調査箇所平面図及び断面図(1/80)

用していた石材かどうかを判断する材料は認められなかった。

両墓を含めて周囲には7基の古墳が存在し、「羽咋七塚」と呼称されている。しかしながら、それぞれの古墳の詳細については不明な点が多い。現在書陵部では、明治41年に七塚の一つである宝塚古墳から出土したという須恵器短頸壺と坏身各1点を所蔵している。その短頸壺は第32図1に示したとおりであるが、口径6.9cm、器高8.6cmを測る。肩部から胴部にかけてはカキ目が施されており、底部付近は回転ヘラ削り調整が施されている。色調は明青灰色を呈し、焼成は堅緻である。これらの形状から、本個体は古墳時代後期に属するものと考えられる。坏身は口径13.1cm、器高3.1cmを測る(第32図2)。底面には回転ヘラ切り痕を残し、その後ナデ調整で仕上げている。その他の内外面は回転ナデ調整が施されている。色調は暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。この形状から先の短頸壺とは所属時期が異なるものと考えられ、古墳時代以降の所産であろう。その他共伴したとされる遺物は全く時期の異なる遺物であり、これらの須恵器と宝塚古墳の関係も今一つ明瞭ではない。



第32図 宝塚古墳出土品実測図(1/4)

今回の調査では、上記のように遺構は一切検出されず、工事は予定通り施工した。

(徳田 誠志)

註

(1)『羽咋市史』原始・古代編 羽咋市史編さん委員会 羽咋市役所 昭和48年